

まいぼつりん 埋没林

約 1300 年前 遠江地震

遠山川・池口川が堰き止められて天然ダムとなる。

森の木々は湖底に沈む。湖には土砂がたまり始め、木々は埋没木となる。

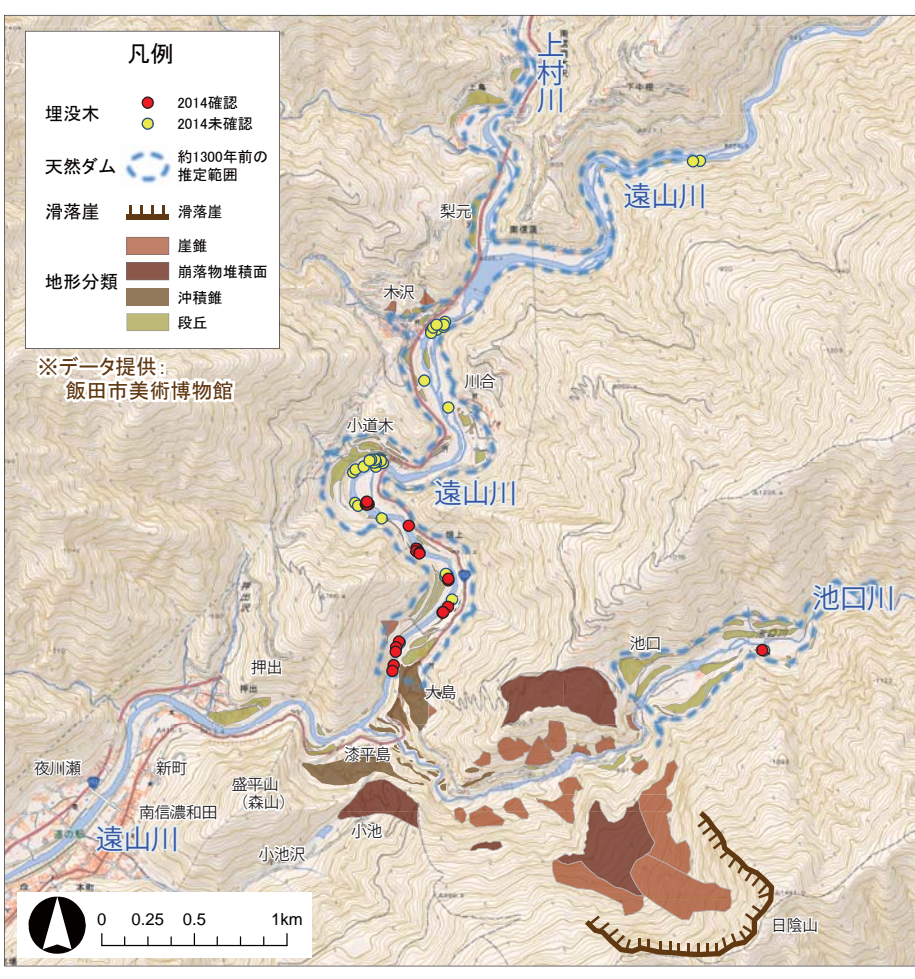
天然ダムが浸食もしくは決壊し水位が低下。

川底が削られ低くなる。一段高い平らに残った土地が段丘となり、畑上、小道木などの集落が発達。

長い時間を経て

現在、河床の低下により再び埋没木が姿をあらわしてきた。南信濃大島、畑上、大淵などで見ることができる。

これらの木のほとんどは、直径 50cm 以上の大木で、中には直径 1m 以上の巨木や樹齢 700 年以上のヒノキもあり、深い峡谷をつくる原始の森であったことを物語っている。



埋没林の状態

土砂の中から多数の埋没木が姿を現し、立ったままの姿で地中に埋もれたものも多くありました。

他の地域の埋没木と比べると新鮮な色を保っており、その心材の強度も現生木に劣らない状態でした。上の写真左側の大きな埋没木は、重機を使って掘り出そうとしましたが、根が深く、掘り出すことができませんでした。

河床から立っている埋没木は、枯れても毛細管現象で水を吸い上げており、容易に腐らないためだと考えられます。

埋没林の年代測定（年輪年代法）

埋没林ができた年代はどうやってわかったのでしょうか。

現在から過去へ複数の「年輪幅のグラフ」を重ねあわせてつくった「暦年標準パターン」というものがあります。埋没した樹木の年輪幅をはかってつくった「年輪幅のグラフ」と「暦年標準パターン」を照合することによって樹木の年代がわかります。この方法を「年輪年代法」といいます。

年代を割り出すために必要な樹皮のついた埋没ヒノキ（南信濃自治振興センターに展示）と、樹皮のない複数のヒノキから測定した結果、枯死年代は 714 年であることがわかりました。

埋没林が私たちに語ること

◎大地変はまた起こるか

遠山の谷には日本最大の断層、中央構造線（西南日本の中央部を横断）があり、それぞれの場所で断層が動いて地震が発生してきました。

歴史に残るのが 1718 年（享保 3 年）の「遠山地震」です。約 1300 年前の遠江地震も中央構造線が動いた可能性がありますので、二つの地震を比べると 1000 年周期の地震となります。

一方、東海地震は約 150 年周期で起きています。東海地震の震源断層は、赤石山地南部の地下約 30km まで入り込んできているため、伊那谷は赤石山地が隆起するという可能性を抱え、今後 30 年以内に高い確率で東海地震が起こるといった予想もされています。

今、それぞれの地域を上げて地震の防災対策に取り組んでいます。

◎山を忘れてはいけない



遠山の山は厳しい。崩れそうな場所から目を離さぬよう、時々、集落の山を歩き、山の様子を監視しましょう。尾根すじや斜面上部に亀裂を見つけたら、そこで継続して観察していく必要があります。

山歩きの体験などを通じて、山や自然の姿を学びましょう。埋没林を古代の地変を証す記念物として永く保存し、人々の営みは自然との共生の中にあることを忘れない様にしていきたいものです。